

福島県建築設計協同組合海外研修会
RCRアーキテクト建築視察ツアー（スペイン・フランス）報告書

日 程：令和元年 10 月 5 日～10 月 13 日（7 泊 9 日）

（台風 19 号による羽田空港閉鎖に伴い帰国日は令和元年 10 月 15 日）

参 加 者：10 名

斉藤 良治/(有)大野建築設計事務所	大橋 堅一/(株)ボーダレス総合計画事務所
坪井 大輔/(有)山内建築設計工房	濱尾 博文/エーユーエム構造設計(株)
高桑 正晴/(有)タック構造設計	渡辺 道直/(株)渡辺建築設計事務所
嵐 繁雄/(有)嵐設計事務所	飯塚 静栄/(有)寿設計
平子 恵俊/(株)永山建築設計事務所	佐々木孝男/福島県建築設計協同組合事務局



写真は視察資料より

視察目的：RCR作品群と歴史的建造物視察

資料によれば、RCRアーキテクトはラファエル・アラнда、カルマ・ピジェム、ラモン・ヴィラルタの3人の頭文字をとって設立した建築スタジオである。1960年代生まれの3人は同じ年（1987年）にバルセロナのバイェス建築大学を卒業し、同級生の多くがバルセロナでキャリアをスタートさせる中、バルセロナから150kmほど離れた故郷のカタルーニャ地方オロット村に根を下ろして活動始める。

2017年に、それまでの作品が評価されプリツカー建築賞初の3人同時受賞という快挙を成し遂げている。RCRがプリツカー賞に値すると評価された理由の一つは、彼らが地方の価値観と国際的な価値観を両立させることの可能性を示唆したことにあり、彼らは建築がそれぞれの土地のコンテキスト（背景・環境）に沿ったものとなるように、その土地と空間が語り掛けるものにコミットメント（関係・関与）してきたことだという。授賞式は同年5月に日本の迎賓館赤坂離宮で行われているが、彼らは京都や吉野などに度々足を運び日本の伝統・文化や地域の街並み・自然景観に触れている。

30年にわたって地方に拠点を置きながらも、文化的施設や教育施設を中心に身近なエリアを越えインパクトを与える制作活動が続けてきた彼らは、2008年に旧彫刻鑄造工場であった「バルベリ・スペース」へ拠点を移し、2013年にRCR・BUNKA財団（日本語の「文化」に由来）、2017年にはRCR・LAB・A建築研究所を設立するなどして、建築とランドスケープを基本ベースにアートや文化など、社会との関わりを促進させる活動が続けている。

今回は、そのような彼らの作品群とバルセロナを中心とした歴史的建造物の視察見学を目的とした海外研修である。

2019.10.5（土）

（羽田→ミュンヘン経由→バルセロナ）

さて、本ツアーであるが参加者22名の建築ツアーに組合員10名が参加したものであり、他の参加者は主催者した（株）トラベルプランのツアー常連建築家が多い。

羽田発12:35のバルセロナ行きはドイツのミュンヘン経由となるが、乗り換え時間を含め目的地までの所要時間約16時間、飛行距離約1万kmの旅である。時差7時間が戻ることから同日の現地時間21:20にバルセロナ国際空港に到着、空港に近いフィラ地区の国際見本市会場に隣接するホテル・ポルタ・フィラ（伊東豊雄：2010）が最初の宿泊地である。一休みして荷物の整理をしていたら就寝は現地時間24時になってしまった。

2019.10.6（日）

（国際見本市会場、サグラダ・ファミリア教会、カタロニア音楽堂、ミース・パビリオン等）

早朝7時に朝食を済ませ、早々、ホテルに隣接したオリンパス・オフィスビル（RCR：2006）のステールで統一された外観等を見ながら、かつて国際見本市会場として使用したエントランスホール・パビリオン（伊東豊雄：2006～2007）周辺を散策した。

その後、専用バスで市内の施設見学である。車窓から街並みを見ながらの添乗員の説明によれば、バルセロナは人口約160万人の都市でスペインではマドリードに次ぐ第2位の都市で、10月上旬の気温は15～24度と日本とあまり変わらない。今は比較的雨が少なく紫外線の強い時期とこのことである。また、バルセロナの都市計画であるが、原型は18世紀半ばの拡張計画案にあり400m×400m単位のユニットで市街地が構成されており、400mを3等分したところに20mの通りを取り込んでいることから1区画の一边は113.3mとなる。当初計画では高さは16m4階建てとし区画の2側面だけに建物建設を認め区画内部は庭園空間を想定していたが、その後人口密度が高まりコの字型、最終的にはロの字型になり中庭空間は消失する運命をたどることになったという。なお、街区交差点部に隅切りがあるが、将来の新交通機関を考慮して導入した名残とのことであり今に生かされている。ガイドさんの話では、中心部の建物は1階に店舗、2階以上がア

パートメントというスタイルが多く賃貸より持家意識が高いが、賃貸の場合は家賃が 70～80 m²／戸で 10 万円／月以上となり大卒の初任給に匹敵することから共稼ぎ世帯が多いという。

午前中にサグラダ・ファミリア教会（A・ガウディ：1882～）、午後にはカタロニア音楽堂（D・イ・モンタネール：1908）、カテドラル等の旧市街地を散策の後、オリンピック会場に近いミース・パビリオン（ミース・V・d・ローエ：1929）を視察した。ミース・パビリオンの隣接地には磯崎新が手掛けたカイシャ・フォーラム（歴史的建造物をリファインした商業施設）もあった。

盛り沢山の視察で夕方 18 時過ぎにバルセロナのサンツ地区中心部にあるホテル・バルセロ・サンツ（サンツ駅上部に位置する都市型ホテル）に到着した。この周辺は R C R が 2009 年から再開発を手掛けているエリアとのことであった。

2019. 10. 7（月）

（コロニア・グエル教会、ポンペウ・ファブラ大学図書館、ジョアン・オリヴェール公立図書館）

この日は 9 時に専用バスでホテルを出発。10 時に郊外あるコロニア・グエル教会（A・ガウディ：1915）に到着した。公共交通機関が通らない場所に立地しており一般の観光旅行では見学出来ない施設である。この施設は計画の一部が建設された未完成施設ではあるが、全体計画図を見るとその後に手掛けたサグラダ・ファミリア教会の施設づくりに生かされたヒントが見て取れる。

約 1 時間の視察の後、バルセロナ市街地中心部に戻り 12 時過ぎから 14 時まで旧浄水場管理施設をリファインしたポンペウ・ファブラ大学図書館等を視察した。15 時には中心部のカタルーニャ広場に移動し、サン・アントニ地区のジョアン・オリヴェール図書館（R C R：2007）見学組とカサ・ミラ（A・ガウディ：1910）の見学組の 2 班に分かれた。夕食後、組合員全員でカサ・パトリヨ（A・ガウディ：既存改修 1906）を見学した。

旧市街地は新築物件が少なく再開発も既存施設再生型でリファイン、リフォーム中心に進めている一方で、南西部の新市街地はバルセロナ・オリンピック等の誘致もあり各種競技施設や宿泊施設、選手村（アパートメント）等の新建築が展示場のように建設されている。



2019. 10. 8（火）

（リポイ地域文化センター、サンタ・マリア修道院、ペドラ・トスカ公園構造物&管理事務所）

8 時 30 分に専用バスでホテルを出発、移動距離約 110 k m で人口 10, 600 人の山間の村リポイに向かう。10 時に村の中心部にある歴史的建造物サンタ・マリア修道院（ロマネスク建築様式）と赤錆色のスチールを基調とした建築作品で有名な R C R の地域文化センター・ラ・リラ・シアター・パブリック・スペース（R C R：2011）を見学した。少人数のグループに分かれ昼食を含み 14 時までの自由見学となったが、13 時を過ぎないとレストランがオープンせず集合時間ぎ

リギリの昼食となった。ちなみに、スペインの昼食時間は日本と比較すると2時間程度遅く一般的に2時前後、夕食は20時頃からとなる。日の出・日の入りも遅く10月末まで1時間遅いサマータイム制を取り入れている。日本の夕方19時はスペインの正午12時である。



その後、移動距離約35kmで人口34,000人の町オロットに向かう。15時30分にオロットに近いガロッチャ火山帯自然公園内のペドラ・トスカ公園に到着、バスを降り1km以上の距離を徒歩で現地施設見学に向かう。入口に設けられた通路はスティール（鋼）と岩から構成されており、幅の狭いスティールの線が岩を押し分け人が歩むスペースを作り上げるなど、その空間の荒々しさが新たなランドスケープを創り出している。次に見た管理事務所もスティールを主体とした施設で、自然の中で人口構造物がどう存在し対峙していくのかを見るものに常に問いかけるような思いに駆られる。そのような衝撃を受けながらオロット郊外のホテルに着いたのは17時30分を過ぎた頃である。



RCRアトリエ前で（スペイン：オロット市）

2019.10.9（水）

（バルベリ・スペースRCRアトリエ、トゥッソル・バジル陸上競技場、ラス・コルス・パビリオン&レストラン、RCR実験施設ラ・ヴィラ）

今朝はホテルが連泊となるのでスーツケースに荷造りする必要がなく比較的ゆっくりとした時間を過ごせた。10時に専用バスでオロット市内にあるRCRの事務所見学に向かった。役員は不在で所員の方に旧彫刻鑄造工場の内部を改修して使用しているバルベリ・スペースRCRアトリエ（RCR：2008）を案内いただいた。室内は撮影禁止で写真紹介できないが、長方形の2棟の建物を接続したアトリエは表裏の2つの通りに面した区画にあり、施設外観の多くは彫刻鑄造工場そのままに設計事務所と分かる看板はない。木製の出入口を開けると中央に中庭が見えるガラス面、右棟に図書棚を配したライブラリー、対面奥に当時のクレーンを配した作業場をそのまま活用したワークショップ（集会室）とスクリーニング室（映写室）、左棟奥にワークステーションを増設、手前左棟1階に学生主体の作業スペース（10人程度）、その2階が所員執務室（20名程度）となっている。道路向かいに隣接するBUNKA財団（RCR：2013）では、これまでRCRが取り組んできた施設の模型や図面、スケッチ等を見ることができた。

その後移動し、11時から郊外のトゥッソル・バジル陸上競技場（RCR：2012）に点在する管理棟、屋外照明、休憩所&倉庫などの関連施設を1時間以上かけ歩いて見学した。村の中心部までバス移動の後、昼食を兼ねて見学したのがリファインしたラス・コルス・パビリオン（RCR：2005）及びラス・コルス・レストラン（RCR：2003）である。パビリオンの一部にあるホテルを見学して驚いた。1棟ごとに仕切られた室内の床、壁、天井はすべて緑色の透明ガラスで家具、壁、床材はない。隣接するレストランは外観をそのまま残すことで周囲の景観に馴染んでいるが、内部空間は一変し、素材、色彩、インテリアを含めた現代的空間構成は来訪者を圧倒する。



本レストランでの昼食後、オロット郊外の村で進めているRCR実験施設「ラ・ヴィラ」プロジェクト会場を視察した。こんもりとした森のある山、その間を小川が流れ、農作業や酪農に使われた小屋が点在する140haの広大なエリアを「建築だけでなく、あらゆる種類のクリエイティビティを共有し実験を行う場」とするとの構想を描き、現在取り組んでいるのは「紙のパビリオン」の建設で、日本の吉野杉や和紙を用いて人々が瞑想するようなスペースをつくるという。

夕方にホテルに着いたが、連日の専用バスでの移動にも関わらず、自然景勝地の中での視察見学が多いこともあり毎日一万歩以上も歩く姿はウォークラリーのようである。

2019.10.10（木）

（マス・エル・ヴェント・ゲストハウス、ベル・リョク・ワイナリー、ラ・アルボレダ公園施設）

早い朝食を済ませ8時過ぎに専用バスでホテルを出発し、移動距離90kmで地中海に面した人口18,000人の港町パラモス（リゾート地）に向かう。10時に内陸部の丘に位置する公園内のマ

ス・エル・ヴェント・ゲストハウス（RCR：2010）に到着する。集会場として利用されていた石造りの建物をリファインした施設は外観を変えることなく内部改修しているが、隣接して新設したバーベキューハウスはRCRが一貫して用いている赤錆がかかったスチールを活かしたオブジェのようなものである。



その後バス移動で約 30 分と徒歩移動約 20 分で 12 時から郊外に位置するベル・リョク・ワイナリー（RCR：2007）を見学した。本館外観は一般的な売店&レストランであるがブドウ畑に隣接して地下に建設したRCR設計のワイナリー貯蔵施設は想像をはるかに超えた創造性豊かな施設である。見学コースとして施設内を見ることができが人工照明を一切使わず地上からの自然光で地下空間を見せる演出は圧巻である。



ワインを飲みながらの昼食の後、町なかにあるラ・アルボレダ公園内の管理施設&レストラン（RCR：2005）を視察した。既にレストランは閉鎖され、町なかでの運営の難しさを感じさせる施設であったが、独特な赤錆色の色彩は存在感がある。

本日の視察見学はここまでであるが、すでに 16 時 30 分を過ぎている。ここから国境を越えて本日の宿泊地ベジエに向かう。フランス南西部の地中海に面する人口 73,000 人の都市ベジエは歴史遺産に登録されたミディ運河とオルブル川の交差点で交通の要地として発展した都市である。移動距離約 200 km で到着予定は 19 時 30 分の予定、連日、十分すぎる視察見学コースである。

2019. 10. 11 (金)

(スーラージュ美術館)

昨日は中継地点ベジエ市に一泊した。本日も早朝 8 時過ぎにホテルを出発し移動距離約 190 km で内陸部に位置する人口 35,000 人の町ラディスに向かった。海沿いの都市からピレネー山脈の山間の町への移動は約 3 時間の長旅である。目的地であるスーラージュ美術館 (RCR : 2014) に 11 時過ぎに着いた。昨日最後の施設見学から 2 日で 400 km の移動距離での施設見学は通常の建築ツアーでもなかなか叶わない。本日はこの 1 施設だけの見学である。見学時間は館内及び昼食、周辺散策を含め 3 時間 30 分であったが美術館の内・外部見学だけでも 2 時間近くは見学いられた。本美術館は地元出身で現代アートの巨匠ピエール・スーラージュが寄贈した作品 500 点を所蔵する美術館で、「黒の画家」と呼ばれたスーラージュの版画、絵画、ガラス、ブロンズなどの作品展示が、RCR が設計した広さ 2,500 m² の赤錆色のスチールの建物とともに異彩を放っている。



RCR 作品の最後の施設見学を終え、空港のある人口約 45 万人の都市トゥールーズに向かう。移動距離約 150 km を 3 時間かけての最終移動はホテル着が 17 時 30 分であった。



2019. 10. 12 (土)

(トゥールーズ→フランクフルト経由→羽田)

早朝 7 時に専用バスでホテルを出発し、近郊のトゥールーズ・ブラニャック空港へ移動したものの、空港カウンターでフランクフルト発羽田行きの欠航を知ることとなる。昨夜から現地 TV でも日本の台風被害状況が報道されており心配していたが、結果として 10/12 と 10/13 の両日ともに羽田・成田空港閉鎖とのことであった。

出発は遅れたが予定どおり 9:45 発の飛行機でフランクフルトに向かった。11:45 に到着したものの空港内の待合室で本日の宿泊先と飛行機のチケット手配を待つことになった。翌日の 11/13 発のチケットは確保できないとのことで、ビジネスクラス申込者 3 名とパリ経由で別途帰国する 2 名を除き、添乗員を含め 18 名の帰国チケットは 11/14 以降となった。夕方 16 時頃に斡旋された空港近郊のホテルに向かうことになった。ホテル到着後の夕食時までには組合参加者の帰国ルートが決まったが、少人数ごとの 4 班に分かれそれぞれ東南アジア経由での帰国となった。

現地では海外旅行保険の補償内容が話題となったが、ホテルの宿泊費及び夕食 (20 ユーロ限度)、朝食は航空会社負担であった。



2019. 10. 13 (日)

(番外編：フランクフルト市内見学)

朝食後の午前中にホテルの送迎バスで再度空港に向かう。正午までに航空チケット及び本日の宿泊先 (昨日とは異なるホテル) が決まり 13 時前に送迎バスでホテルに到着した。

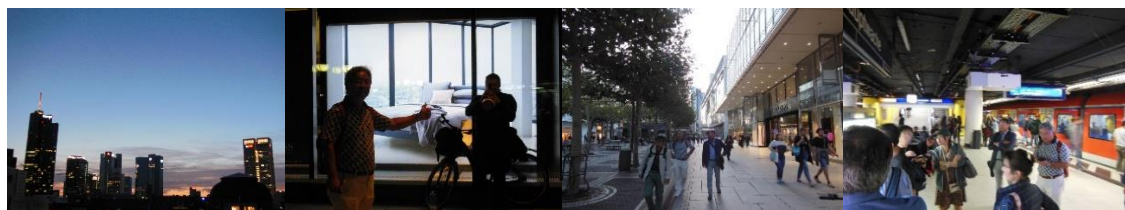
ここからは気分を新たに市内観光である。ホテルからの送迎バスで再度空港へ、そこから地下鉄で中心市街地に向うが切符を買うにも一苦労、現地の親切な紳士に団体チケットを購入してもらい、感謝、感謝である。中央駅から 2 つ目の駅で下車し、旧市街地にそびえる聖バルトロメウス大聖堂を見学した。13 世紀から 15 世紀にかけて建築されたが火災焼失、戦争による破壊の後、1950 年代に再建され現在に至るとのことである。その後に向かったライン川に架かるホーエンツォレルン橋 (再建：1948) では大勢の観光客が行き来していたが、カップルによる「愛の南京錠」が橋の欄干にびっしりとかけられている様子はインスタ映えする光景であった。帰り道に、ゴシック様式の木組みの建物が並ぶレーマー広場を散策した後、ショッピング・ストリートの中にある近代的ショッピングモール・マイ・ツェイル (マッシミリアーノ・フクサス：2009) を見学した。この施設はガラスのチューブが建物内を貫くような奇抜なデザインの商業施設で圧倒されたが、建築基準法や維持管理を考えると日本では建設できないとの思いを強くした。

2019. 10. 14 (月)

(フランクフルト→東南アジア経由→成田 or 羽田)

ようやく組合員 4 班に分かれての帰国である。残念ながら日本への直行便はなく経由地は香港、ベトナム、フィリピンとバラバラである。早い便は日本に到着後 10/15 (火) に帰宅できたが、遅い便は東京泊で 10/16 の帰宅となった。後日、添乗員からの連絡で参加者全員無事に帰国したことが確認できた。

建築物の視察見学もさることながら、異文化とのふれあい、組合員の交流、アクシデントの対応など実に内容の濃い研修であった。





(あしがき)

本報告書は同行した佐々木（事務局）が旅行記としてまとめたものであり、建築的視点での報告は年度末までには若手参加者による紀行文（1人／1施設）としてまとめます。各自、特に関心を持った建築物の印象、評価、感想等をいただくこととしておりますので、あらためて報告させていただきます。

